ネギまに生まれた始祖精霊

蒼騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギまに生まれた始祖精霊

【Ｎコード】
Ｎ００２３Ｚ

【作者名】
蒼騎

【あらすじ】
ネギまの世界に転生した主人公の話。

この作品は作者の処女作です。温かい目で見てください。

※この作品は独自設定、キャラ崩壊、原作崩壊、アンチがあります。
苦手な人は見ないでください。

プロローグ

「知らない空間だ・・・」

なんだこの真っ白な空間は？
はっ！まさかここは二次創作でよくでる神様のいる空間か！
いやいやおかしい・・・俺はまだ死んでないはずだ。これがテンプレ通りなら、俺が何らかの理由で死んだから転生させてあげるって展開のはずなんだがどういうことだ？
それともこれはただの夢という落ちか？

「その通りじゃ。これはお主の夢の中じゃ」

神様があらわれた。
俺が振り向いてみると・・・眼に光が入って眩しい！？
そこには顔が輝いていて良く見えなかったが、良く見てみるとそこにはかなり伸ばした髭とツルツルで光り輝く頭をもった神がいた。
神様の神々しい光ってツルツル頭の反射の光だったんだなっとしみじみ思うと・・・

「お主は失礼なやつじゃな」

ん？思考が読まれてる？
まぁ神様の良くある能力か・・・人の頭を覗き見る変態め！

「これこれ、神を変態扱いするんじゃない。」

「で、その変態神様が一体何の用で？それになんで俺の夢の中に入ってきた？」

「それはお主を転生させようかな～と思ってきたのじゃ。お主の夢の中に来たのは、はっきり言って偶々じゃ。基本ランダムで誰の夢の中に入るかは儂も分からんのじゃ」

へ～

転生か・・・面白そうだ。一度やってみたいと思ってたんだよな。魔法とかあるファンタジーなところが良いな。やっぱ男は魔法と言う浪漫がある世界に行くべきだと思うんだよね。

「ふぉ～そうかそうか。良かったのじゃ」

「いったい何が良かったというんだ？」

「儂は暇でな。暇だから誰かで遊ぼうと思ったんじゃ。ちなみに転生させようとしたのはお主で7人目じゃ。前の6人は転生したくないと言って駄目だったんじゃ」

ふ～ん。転生とか誰もしたことがなさそうなことを断る人が結構いるもんだな～

なんでだろう？

「前の６人は大切な人を悲しませたくないとか好きな人と離れたくないって言って断ったのじゃ」

え・・・？普通神様の転生って周りから自分の存在を消して転生させるんじゃないのか？
それなら俺もやめｙ・・・・・・・
って俺にはもうそんな人いね～ｏｒｚ
両親はもう死んでるし、好きな人は告ってもキモイの一言ですべて振られるし・・・
別にこの世界に未練なんてないかもｗてか前の６人はリア充だったのか。
ん？なんか神様が泣いてるんだけど・・・

「グスッ・・・なんて可哀相な人生なんじゃ。儂からの気持ちとして今転生すると、転生先でなにかを叶えさせてやろう！」

なんて優しい神様なんだろうか！
なにを叶えさせてもらおうかな～やっぱ転生と言ったら能力だよね。
俺最強とかやってみたいしな～・・・って待てよ。

「この転生って何の能力なしのただの人として転生させるものだったのか？」

「その通りじゃ。なんで転生するのに能力なんていうんじゃ？まぁ

お主は今があまりに可哀相なんで能力を1つや2つなら与えよう」

ほっ・・・良かった。
でもこれって喜んだらいいのか、泣いたらいいのかわかんね～・・・・

「笑えばいいと思うよ」

「笑えねーよ！なに真顔で言ってんだよ。めっちゃ傷つくわ！」

「まぁ冗談は置いといて、転生先で願うことはどうするのじゃ？」

「まずどこに転生するのか教えてくないか？」

「希望どこでも良いぞ。希望がなければランダムじゃ」

「じゃ『魔法先生ネギま！』の世界で」

魔法が使いたいならやっぱネギま！の世界だよね。
リリなのでも良いけどあそこは管理局がうざそうだし・・・なにより可愛い子が少ない！
ネギま！は正義の魔法使いがうざそうだけど、原作のクラスメイトみんな可愛いらしいからな。
それにエターナルロリータという貴重な存在もいるし！
あっ・・・リリなのにもいるか・・・でもあれはなんか違うんだよな。

「お主がロリコンということがよく分かったのじゃ。あと早く決めてほしいんじゃが？」

おっと、能力はなんにしようかな～
最強でありたいしそれになるべく長く生きたいから吸血鬼ってもありなんだけど、原作みたいに吸血鬼だからって狙われるのは勘弁したい。
その条件で俺の知識の中にあるのはやっぱあれかな・・・

「俺を始祖精霊として転生させてくれ。それで『神曲奏界ポリフォニカ』の始祖精霊の能力を悪いところだけ取り除いたやつを頂戴。具体的に言うと、神曲は必要なしで絶望しても死なないようにしてくれ。
あと羽根の設定として、羽根は基本的に六枚で本気だせば八枚に変わるようにして『神曲奏界ポリフォニカ』に出てくる八柱の始祖精霊の羽根を自由に切り換えて使えるようにして。」

「分かったのじゃ。その願いを叶えよう」

よし！これでほぼすべての属性を使える存在になれる！

「まだ他になにかお願いできる？」

「ん～・・・小さい願いなら大丈夫じゃ」

「それなら俺の生まれ変わる前の今の記憶を忘れないように保存し

てくれ。あと原作の『魔法先生ネギま！』の知識をすべて覚えてるんじゃなくて断片的に残るようにしてほしいんだけど・・・」

「そんなことなら余裕じゃ。他に能力が欲しいとか言うと思ったぞい」

「いやいや、始祖精霊の能力だけで十分だから」

「ならもう転生させるぞい」

「ちょっと待って。原作のいつに転生させるのかまだ聞いてないんだけど・・・」

「そんなのお主の能力が決まった時にどの時代に転生させるかなんてものは既に決まったようなものじゃ。」

「え・・・？」

「まぁ楽しみにしているのじゃ。今のような悲しい人生を送るんじゃないぞ」

神様がそういうと突然上空から裸の小さい天使が降りてきた・・・
天使が・・・降りてくる・・・このシーンは！
なるほど・・・こういう風に転生するのか。
ならここはお決まりのセリフを言うしかないな。

「パトラッシュ・・・僕はもう疲れたよ」

そして僕はどんどん空に運ばれていった。
その途中で、あの名作のキャラは実は転生したんだなと思っている
と意識を失った・・・

プロローグ（後書き）

始祖精霊が分からなければ「ポリフォニカ」のｗｉｋｉを見てください

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

まさかの時代

ん・・・無事に転生できたのか・・・？
身体を動かそうとするが動かない。
おかしいな。身体が動かない・・・それに周りは真っ暗で何も見えないし。

あ～なるほど。始祖精霊として転生したから今は精霊として生まれる途中で身体というより存在そのものとしての状態か。この状態なら普通意識がないけど俺は転生で生まれるし記憶もあるから身体より先に自我が生まれてるのか・・・。
意識はあるけど身体がないから周りを知覚することが出来ないってことか。

ここで精霊について少し教えよう。
ポリフォニカの原作の精霊には２つの特殊な能力がある。

１つ、物質化という能力がある。
これは精霊は精神エネルギーで構成されているため、そのエネルギーを使って物を作ることができる。精霊の肉体もこの物質化という能力で作っている仮初の身体である。

２つ、精霊雷を使う
これは自身の精神エネルギーを攻撃に使って相手にぶつけるとき、そのエネルギーが何故か
雷を纏って飛ぶので精霊雷と呼ばれている。

精霊についての解説も終わったし、暇だから寝よっと・・・

ふぁ～良く寝た・・・。さ～て身体はどうなったかな～
身体を動かそうとすると・・・動かない。
てかまだ身体が出来てない！

暇だ～・・・そうだ、自分の名前を考えよう。
そういえば精霊には名前が必要っていってたような気がする。精霊の名前はその存在を表すと言うから偽名とか使えないし一生使う名前を考えなきゃ！

名前・・・名前・・・なまえ・・・
精霊の名前って確か名・柱名・精名の３つで構成されていたはずだから名前を考えるだけでめんどうだな・・・
ポク・・・ポク・・・ポク・・・チ～ン・・・閃いた！
俺の名前はレイチェル・フォン・オルタードにしよう！

すると突然・・・周りに光を感じた。

「はぁ～やっと身体ができたか。さてさてどんな身体になったかな～・・・って小さ！それに裸だ！しかも下が付いていない！？」

おいおい・・・俺は女というより幼女になっちまったよ。
それにここは大きな木ばっかりだな・・・どこかの森の中か？
まずは状況の確認が必要だな。

「え～と、俺は神様からネギまの世界に始祖精霊として転生させてもらって女になり今に至ると・・・」

そうだ！始祖精霊として生まれたなら羽根が出せるはず。
それならさっそく羽根を展開してみよう。

「で・・・どうやって羽根を展開できるんだ？」

そんな風に考えていると身体の後ろが光りだし六枚の無色の透明な羽根が生まれ、身体が浮かび上がった。

「羽根を意識すると勝手に出るのか・・・でも羽根に色が付いていない・・・」

羽根を消して今度は紅をイメージしながら羽根を展開すると・・・
今度は紅い羽根が展開された。

「なるほどね。イメージによって羽根が変化するのか・・・それにしても綺麗な羽根だ」

その後も紅、翠、青、紫、白、黒、銀、金の八色の羽根を順番に展開した。
ふとその時、イメージで羽根の色が変わるなら虹色のように出来るかもと思い試してみると・・・
そこには八色の八枚羽根が展開された。

「虹色の羽根は無理だったか・・・でも一枚一色で八色の羽根が出来たから良しとするか」

あとは自分の力と容姿の確認か・・・
こんなところで精霊雷を使うと山火事になるかもしれないから海か湖のあるところに移動するか・・・と思い八色の羽根を展開したまま空に向かって飛んだ。

そして上空から湖を見つけてそこに向かった。

水の澄んだ湖に着いてすぐに湖を覗き込んだ。
するとそこには、紅い髪で紅い眼の可愛い幼女の顔があった・・・

「おいおい、ポリフォニカの原作のコーティを幼くしたような顔じゃないか！いや、どちらかと言うと幼いフラメルと言うべきか・・・

」

今はまだ5歳のようなだが時間が経てば大人の姿になるだろう。
精霊は長い年月を生きてゆっくり成長するからどれくらいの時間がかかるか分からないけど・・・
まぁ可愛いから良いな。満足満足。

さ～て、次は能力の確認といこうかな。

「ポリフォニカの原作での精霊の力はすべて雷のような稲妻に見えるらしいけど、このネギまの世界ではどんなふうに変更されるか楽しみだな～」

湖に掌を向けて・・・力を放つ。

ドォーン！！

湖に巨大な水柱が出来て、身体が濡れる。

「は？」

「おいおい、なんて力だよ。」

でも、雷を纏ってなかったな。無色の何かが飛んでいったような感じだった。
たぶんあれが魔力なんだろうな・・・

「う～ん、この世界の精霊は精神エネルギーを使わずに魔力を使うから精霊雷は使用できないということか。あくまでネギまにある魔力と魔法を使うことが出来るってことかな」

ってことは俺の身体は魔力で構成されているのか。
力の制御は徐々にやっていくとして、次は非物質化できるかどうか・・・

「お～簡単に俺の身体が消えた・・・」

しかも視界が前だけじゃなく３６０度すべて見渡せられる。
って、オエッ！
急に全方位見れるようになると気分が悪くなってきた・・・
この非物質化状態も力の制御と同様に徐々に慣れていこう。
すぐに物質化して今後について考える。

「そうだ、今がいつの時代かわからないから調べよう。」

人にばれないように慎重に空に上がって周りをよく見渡すと、さっ

きは湖しか眼に入ってこなかったがそこには樹や草原、森や湖など綺麗な大自然が広がっていた。
周りの気配を察知しようと感覚を広げてみるけど、何も感じない・・・

「あれ?近くに誰もいないのかな?」

そう思いさらに上空にあがり大地を見下ろしてみると、そこにはただの大自然がひろがっていた・・・

「おかしい・・・建物がなにもない。人も動物も見当たらない・・・まさか・・・」

俺はさっきまで、まず上空に上がって人を見つけたら聞いて確かめれば良いかと・・・安易な考えを持っていたがそれはすぐに砕かれた。

「まさか・・・今は地球の誕生した年なのか・・・」

そんな馬鹿な―!!
俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ――!!

まさかの時代（後書き）

次は一気に時代が飛びます

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

飢えた者たちとの出会い（前書き）

時代が一気に飛びます

飢えた者たちとの出会い

よっ！
私の名前はレイチェル・フォン・オルタードだ。
ん・・・？私？

そう、私だ。
転生してから数日たって、ふと思ったんだ。
せっかく女になったんだから一人称を俺から私に変えようってな。
なかなか慣れないけど時間ならたっぷりあるからその内慣れるだろうと思っている。

そして今は転生してから一週間が経った。
ちなみに私はあれからずっと非物質化状態で生活している。
一週間も経てば３６０度の視界なんて慣れたものだ。というかかなり便利だと思うようになった。
なんで非物質化状態で生活しているかと言うと、物質化して生活しているとお腹がすくのだ！
そして今この地球に樹と海と大地など自然だけで生物は存在していない。

精霊は物質化して生活しているとその物質化した生物の体の構造も真似るらしく、人間に物質化したら腹が減るし、眠たくもなるらしい。
だから食べられる物が生まれるまで私はずっと非物質化して生活するしかない。

そしてここからが重要なことなんだが・・・

俺の記憶からネギまの原作知識だけが全部抜け落ちている・・・
前世での自分のことや、読んだ漫画や小説の内容は覚えているんだけどネギまだけがない。神様との白い空間での会話でこの世界には魔法があるということは分かるんだがその程度の知識しかない・・・
神様には断片的に残すように言ったはずなのに・・・これは神様のミスなのか？

魔法を唱えようとしても、唱えるためには物質化しないといけないから魔法はまだ使うことができない。
そして私は何もすることがなくなった・・・
もし私が絶望で死ぬ本来の精霊だったら私はすでに死んでいるかもしれない・・・
何もすることがない・・・退屈・・・
それを今から何千年と過ごす・・・何も変わらない退屈な毎日を・・・

前世でニートだった私は無気力で一日中何もしなかったり、寝てたり過ごして何もしたくねーなんて思っていたがそんなものとは全然違う。
何もしたくないじゃなくて、何もできない・・・
この時、私は退屈は人を殺すという言葉を本当の意味で理解できた。

私は食べられる物が生まれるまでこの世界を俯瞰することしか出来ない・・・
だから・・・

私はこれからこの世界の行く末を見守っていこうと思った・・・

～完～

いやいや！まだ終わんないから！始まったばかりだから！！
とりあえず恐竜が生まれて繁栄するまでこの世界を俯瞰しながら生きていこう！
多分４０億年ほどかかるんだろうな～と思いながら意識を薄く広く拡げていった・・・
そして、自分と言う概念や時間と言う概念を感じずに、ただ世界と同化したかのように世界を俯瞰していった。

はいっ！ただいま恐竜の全盛期でございます。
ふぅ～長かった。そして辛かった・・・
なにが辛いというと・・・
昆虫や恐竜の生活を見るのが辛かった・・・
ちなみになぜ辛かったかと言うと、生活と性活の両方を見なければならなかったことだ！
世界を昼夜問わず俯瞰していると嫌でもそんな生々しい光景が入ってくるんだよ！
この鬱憤は恐竜の虐待で晴らすしかないな・・・
そのためにはまず物質化するか・・・

そして物質化して大地に降り立つ

「おぉ～久しぶりの大地！って私はまだ幼女なのか・・・」

転生してからずっと非物質化状態だったからな～肉体は成長してないのか・・・
まぁ今から恐竜時代は1億年ほどあるからそれだけ時間が経てば立派なボディに成長することだろう。これは気長に待てばいいな・・・

「腹ごしらえの前にまず私の服を作らなくては・・・このまま裸だとさすがに恥ずかしい」

そう、私は今裸なのだ。すっぽんぽんなのだ。
物質化の能力で服を作ればいいのだから簡単だろう・・・

「え～と、紅をベースに白の模様がついたワンピースみたいなのでいいか」

ポンッ！
紅いワンピースっぽいが出てきた・・・
が、これは着れない・・・
何故かと言うと・・・出てきたのが服の構造をしてないし、どこにも頭や腕を通す穴がなくて一枚の平らな紅い板が物質化された。

「へっ？何これ？なんで板が・・・」

ポリフォニカの原作での物質化は自分の精神エネルギーを使って物質を作り出すというものだ。確か、ポリフォニカでの物質化は精霊雷の扱いが不器用だと物質化の能力もうまく使えないみたいなことを言っていた気がする・・・

つまり、この世界での物質化は魔力のコントロールが上手くなれば物質化の能力も上手く使えないってことか・・・
ならまずは魔力のコントロールから始めよう・・・あとはイメージ力の問題もあるのかもな。
そんなことを考えていると後ろから樹が倒れるような音が聞こえたので振り返ってみると・・・

「うにゃ――！大きな怪獣――！！」

恐竜が涎を垂らしながらもの凄い勢いで突進してきていた。
って、恐竜か・・・今まで上空から見てたから分からなかったけど・・・
低い視線から見ると怖すぎる！
それに良く見るとこいつはかの有名なティラノサウルスじゃないか・・・

「よしっ！最初の食料はティラノサウルス、君に決めた！」

私は裸のままティラノサウルスと向き合い、六枚の羽根を展開して飛んだ。
ティラノサウルスが目前に迫ってきて、ティラノサウルスの飢えた視線と交錯した時、右手に意識を集中しながら振り上げ・・・

「エッチ――！どこ見てんのよ！！」

バッチーン！
思いっきりティラノサウルスに張り手をした。
すると、ティラノサウルスの頬が抉れ、歯が砕け、首が折れ曲がり絶命した。

「幼女の裸を見た者には死を」

ふ～食料Ｇｅｔだぜ！
数十億年ぶりに飯が食える。しかも肉が食える！！
おっと、涎が・・・

「めっしだ♪めっしだ♪にっくが食える―♪」

歌いながら死んだティラノサウルスに近づき・・・あることに気が付いた・・・

「どうやって食べよう・・・調理法なんて知らないし、魔法の知識もないから火が出せない。このまま生で食べないといけないの・・・」

ん～そうか。
この世界にも精霊がいるから魔法を使わずに火の精霊を呼び出して使役すればいいのか。

「魔法の詠唱じゃないが思い立ったが吉日だ。」

「我レイチェル・フォン・オルタードの名を背に召喚す」

レイチェルは朗々と詠唱をはじめた。
静かに。流れるように。

「名を問わず・柱を問わず・枝を問わず・これ数多なる精霊の女王が命なり・我が名に仕えし誉れを欲するなれば・速く馳せ参じよ・・・・・フォンの柱名、オルタードの精名、レイチェルの名の下に集い顕れよ」

それは命令の句でありながら・・・何処か子守歌の様に柔らかく優しい響きを帯びていた。
すると・・・地面や空から精霊がやってきた。
一つ、二つ、三つ・・・数えられたのはそこまでだった。
次の瞬間、爆発的な速度で精霊が表われ周りは光に満ちていた。

おそらく、数千数万の精霊がこの場所に集まっているだろう。

『我らレイチェル・フォン・オルタードの御名にお仕えいたすを欲するものなり』

集まった精霊達が一斉に唱和した。

「――ご苦労。この恐竜を料理したい。だから料理に必要な分の火を起こして欲しい」

『御意』

レイチェルの言葉に無数の精霊達が唱和で応える。
そして精霊の群れは一瞬で音もなく消えた・・・
まるでその出来ごとのすべてが幻影であったかのように
残ったのは、数柱の火の精霊と燃え盛る火だけだった。

「この世界の精霊も数千数万集めれば喋れる様になるんだな・・・
その前に精霊の召喚も上手くいってよかった。」

物質化能力で黒く堅い鉄板の様な謎の物質を作り、料理を開始するレイチェル。

「じゃじゃーん、ティラノサウルスのステーキ出来上がり～」

ステーキが完成した時レイチェルの口は涎まみれだった。
この時代には箸はなくて素手なので、このままだと熱いと思い右手に魔力を集めステーキを掴み食べる。

「ウマー！」

こうして、レイチェル・フォン・オルタードの波乱万丈の一日は過ぎていった・・・

飢えた者たちとの出会い（後書き）

ポリフォニカの詠唱のところは丸パクリしました。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0023z/

ネギまに生まれた始祖精霊

2011年11月30日20時37分発行